

学習者の認識の拡充、思考の深化を図る漢文授業の展開

吉田 裕久

一 研究協議の主題と趣旨

本学会の研究協議会は、二〇〇七年度から中学校・高等学校の「読むこと」の領域の学習指導について継続して取り上げてきた。二〇〇七年度は小説、二〇〇八年度は説明的文章（評論・論説等を含む）、二〇〇九年度は古典（古文）を取り上げてそれぞれ熱心に議論した。二〇一〇年度の今回は古典（漢文）の順番となった。『学習指導要領』の改訂に伴い、「伝統的な言語文化」の重視によって、これから大きくクローズアップされる領域でもある。

本研究協議会の提案者として、いずれも漢文の学習指導に造詣深い三氏（植田隆―平成21年卒業、北崎貴寛―平成9年卒業、同11年院修了、高尾香織―平成4年卒業、同6年院修了）に依頼した。その際、研究協議の趣旨として、次の四点をお願いした。

- ①『学習指導要領』の改訂を受けて、これからの中・高校の漢文授業は、どのようなことを目指せば良いのか―【目標】
- ②どのような単元編成、教材化が求められているのか―【内容】
- ③どのような学習指導が求められているのか―【方法】

二 研究協議の概要

④学習・指導をどのように評価すれば良いのか―【評価】

以上を受けて、提案者三名から、以下のタイトルで各自二〇分間の提案をもらった。詳細な内容については、前掲の発表を読んでいたこととして、以下は司会者・吉田の受けとめである。

○植田隆「高等学校における漢詩教材を用いた学習指導についての

一 考察

植田氏は卒業してまだ二年目、まさに新進気鋭。さわめて意欲的で、真摯な姿勢が十分にうかがえる提案であった。こうした充実した授業が、この若さで実現していることを驚きと喜びとで聞いた。二つの単元、①「訳詞を比べて読む」、②「教科書の唐詩観を探る」は、いずれも斬新で、このような漢文授業であれば学習者が意欲的に取り組むであろうと実感できる実践であった。現代語訳にこだわらず、むしろ内容面への追究によって学習者の見方・考え方を描き出す授業を目指し、複数教材を組み合わせ、単元学習として展開している。とりわけ後者は、学習者を教科書編集者の立場に立たせる

斬新な発想である。教科書は学ぶものの、神聖にして冒すべからずという見方から、教科書といえども誰かが作った(集めた)ものという発想への転換は、おそらく貴重な学習の機会を提供したことになったであろう。難解ではあるが、教材、教科書を別の視点から見ることになり、新鮮にして価値ある学習になったと思われる。

○北崎寛寛「表現することで(読むこと)を深める漢文の授業の試み」

北崎氏は教職十二年、まさに中堅。学部・大学院で漢文・漢文教育に取り組み、その問題意識を持续させて、今日に及んでいる。「漢文教育は危機的状況にある」という背水の陣の中で、意欲的に取り組まれた実践である。「入試に役立つ授業という需要から逃げることは許されない」という現実の中で、漢文授業をいかに学習者たちに「意欲が喚起され、思考を深める」ものにしていくか、文字通り格闘しているという印象を受けた。そうした中で、「答え」を探し回る授業が誰にとっても面白いはずはない。それはもはや文学の授業ではなく、最も大切な学習意欲や、知的好奇心をも喪失させている(中略)現在私は「読解から表現へ」をテーマに少しずつ授業実践を試みている。(中略)「読むこと」が閉じたものではなく開かれたものになっていくために、表現活動が重要になってくる」と述べ、二校での実践、「用例によって解釈を指定する」、「訳詩創作」リライ「ト」が報告されている。どちらも表現させることを通して、学習者自身の読み(解釈、思考)を深める授業が実現している。

○高尾香織「郷土古典文学作品の教材化および指導方法の研究」菅

茶山作品と茶山ボエム」

高尾氏は三人の中でもっともベテラン。様々な学校を経験し、

本報告に取り上げられた実践は通信制課程におけるものである。「伝統的な言語文化に親しむ」という改訂「学習指導要領」のねらいに沿うものでもある。「郷土にゆかりのある古典作品を教材化し、郷土資料を映像化した視聴覚教材を用いて展開する学習指導」を提案している。郷土福山地方出身の先賢、儒学者、教育者、漢詩人として優れた業績を残し、今なお偲ばれ、慕われる菅茶山の漢詩を教材にし、それを『茶山ボエム』として写真・絵画とともに創作させたものである。その優れた創作例から、学習者たちが生き生きとこの学習に取り組んだこと、そして意欲的に表現しようとしたことが伝わってくる。こうして本実践の最大の特徴は、生徒に身近な郷土教材を提供し、それを生徒に興味深い映像で表現させたところにあつた。そして、この提案は、日本各地どの地域でも試行できる汎用性の高いものとして共鳴できた。

三 漢文授業の課題と展望

「漢文学習は必要か」と授業の場で学習者から問われることが多くなったという。しかし、こうして意欲的で、工夫に満ちた実践報告に接して、それらの不平・不満を解消・払拭できる方が得られたように思う。むしろ「漢文の授業健在なり」との実感を大きく持つことができた。その背景には、生徒たちの表現活動を積極的に取り入れた点にあつたように思われる。いずれにしても、現代語訳をゴールにするのではなく、漢文テキストと対話し、学習者自らの認識の拡充と思考の深化に培う、学び甲斐のある漢文授業がどう構築・展開できるか、その点に成否がかかっているように思われる。